

要旨 各家庭の食生活を主として担当している主婦の食関連事項の実態や関心から食への意識や態度を知り、調査で得られた資料を分析して、今後の食の方向や今必要な食教育は何かを把握したいと試みたものである。

要約 1991年1月 本学食物栄養専攻の自宅通学生阪神間在住の340家庭の調理担当者に予備調査により検討した計40の設問を学生に説明して回答を依頼し、一週間の留置法により回収した。不備なものを除いた300家庭の全データを記号化してLotus1-2-3に入力し衣食住関心別・就業タイムスタイル別・食生活への自己評価別で集計・比較した。また調査項目間で関連性があるものは、クロス集計を行いその有意性は χ^2 乗検定をした。**結果** 有意差が見られた項目は生活関心別では”わが家の食事は豊か” ”毎日の食事作りの嗜好度” ”日常食の主菜の素材” ”テイクアウト食品の利用度” だけで、仕事の有無では食の簡便化と関連して”夕食の平均調理時間” ”手作りする行事食の種類” ”食生活への自己評価” に見られ、自己評価別では”テレビ料理番組の活用度” ”献立で中心に考える家族” ”包丁類の所有数” ”残菜の処理方法” ”手作りの行事食の範囲” ”食事作りに対する姿勢” であった。食問題で消費者運動したい事は”添加物と安全性問題” 関心事項は”健康指向” 配慮事項は”栄養バランス” 実行項目は”減塩” 志向は”手作り派” がどのグループも1位で差がなかった。これらの結果はベテラン主婦は自分の生活習慣を正しく見つめ直そうという意識が日常の消費行動の中で実践的に育ち、正直に自己評価できる能力を備えており、正確で新しい情報の必要性が示唆された。